

寄書

会長 新潟地震を視察して記者会見



さる6月16日の新潟地震は従来の地震とは違った型の地震であったためか、発生以来エンジニアもサイエンティストも、また、ジャーナリストも、思いつきのようなことをよく調査もしないで発表したり放送したりして世の疑惑を招き、ひいては建設技術の権威にも関するような風潮が出てきた。こうした疑惑を払拭するために、7月11日福田会長は東大教授久保慶三郎氏を帯同現地を視察して、新潟県庁で新潟日報始め12紙の記者と会見した。

新潟地震でジャーナリズムの間で問題とされている点を二、三あげてみると、鉄筋コンクリートのアパートが倒れているが、設計者は上のことばかり考えて下のことは考えないのか。また、古いものは丈夫で新しいものは脆弱だ、スマートさよりも剛建さを欲する。例えば万代橋が落ちないで昭和大桥が落ちた。木造家屋はなんともないのに鉄筋のビルは傾いた。また、いわく今度の地震は軟弱地盤のせいだというのが、新潟地方は沖積層でもともと地盤沈下していたところだから、そのくらいのことは事前にわかっていたはずではないか。また、いわく建築と土木とは耐震構造を別々に考えておのおのの領域で満足しているのではないかと等々である。

福田会長の記者会見での発言の要旨は大体つぎのようであった。

「今度の現地視察の目的は、正しい震度の調査をして、その記録を残すために学会内に「新潟震災調査委員会」を作ったので、調査資料について現地の協力をえたいのと、また、自分が若いとき設計した万代橋を見たり、その他の橋も見て原因についても考えたかったからだ。大正12年の関東地震のときも、福井地震のときも記録がとってあり後で大変役にたった。委員長には東大生研の岡本教授を委嘱した。

今度の地震は関東地震とも福井地震とも異なって特異なものであることを痛感した。地震は大地が振動することであるが、変位ということが重要な要素である。普通

の地震では最初にこわれるが、今度のは少し時間をおいてから倒れたり、こわれたりしている」。

昭和大桥を見てどう思うかとの質問に対して

「昭和大桥も右岸の方は少しも異状がない、落ちたところは特異の地盤であったと考えざるを得ない。万代橋は潜函工法で広い面積でさきえている。万代橋を設計したのは大正15年、関東地震の直後で大地震の教訓を参考にした。橋の上部構造がこわれた例はほとんどなく、皆下部構造がこわれた。日本橋は石アーチ橋で何ともなかったし、二重橋もアーチで何ともなかった。西洋にも紀元前からのアーチ橋がいまも残っているのが沢山ある。そこで形式はアーチがいいという結論であった。いままでの設計ではゆれても元の位置へ戻ることで計算しているが、今度のはもとの位置に戻らないのが特長である。地盤が変動しても落ちないようなものを莫大な金をかけて造り、経済性を無視するようなやり方がいいかという問題についても考えねばならない。昭和大桥も真中が落ちなければもっていたかも知れない。それで今後は桁を連繫するとか、桁受の幅を広くするとかの方法も考えねばならないと思う。

政府はエンジニアが要求するほど金を出さない傾向があり、そのためギリギリの安全さということになる。国の会計法なども、ただ安ければ良いということでは質についてはお構いなしだ。また、工期を急がせて十分チェックする時間もない場合がある。昭和大桥の仕事は立派にできている。コンクリートも立派に打ってある。工事に手を抜いたというようなことは考えられない」。

新潟地方の特異地盤とはとの質問に対して

「砂地盤は普通には強いとされているが、細かい砂が多分に地下水をふくむと振動で液状化して液体と同様になり重いものは沈み、軽いものは浮くという現象を起こす。この流動化は比較的浅いところで起こりやすいので周囲にカーテンウォールを作り、いわゆる井戸側地行を作るのも一つの方法だと思う。地震工学というのはまだ新しく、七、八年前からで、土木構造、地震、土質工学などが共同して研究している。

今度の地震についてもいろいろ研究すべき問題があると思う」。

要旨は大略以上のものであった。なお、この会見に立会われた新聞社は新潟日報、毎日、朝日、読売、日経、産経の各紙、信濃毎日、共同通信、時事通信、新潟映画社、ラジオ新潟、NHKなどであった。また、会長の現地視察には建設省北陸地建、新潟県庁などのお世話になったので誌上でお礼を申し上げる。

【羽田・記】